

ロシア帝国

今回学ぶこと

中世ロシア世界で勢力を拡大したモスクワ大公国を引き継いで、ロシアでは17世紀初めにロマノフ朝が成立した。ロマノフ朝の下で専制君主制が強化され、18世紀にはロシア帝国が成立した。ロシア帝国は世界最大の領土を有する大帝国へと成長したが、その体制は常に安定していたわけではなかった。この大帝国はどのように形成され、発展していったのだろうか。ヨーロッパや日本とのかかわりも視野に入れながら、ロシア帝国の時代を見てみよう。

調べておこう・覚えておこう

- ピョートル1世とエカチェリーナ2世という2人の皇帝の生涯について調べてみよう。
- ロシア帝国の領土拡大の過程を、地図の上で確認しよう。
- 19世紀ロシアにおいて、どのような改革が実施されたのか、調べてみよう。

ロシア帝国の形成と拡大 ～ピョートル1世からエカチェリーナ2世へ～

17世紀末にロシアの君主（ツァーリ）に即位したピョートル1世は、西欧諸国にならって軍備の増強や産業の振興をはかり、国力の充実に努めた。対外的には、1700年から20年間に及ぶスウェーデンとの北方戦争に勝利して、北東ヨーロッパでの覇権をにぎった。この間にピョートルは、「西欧への窓」として新首都ペテルブルクを建設した。1721年、北方戦争の勝利に際して元老院は、ピョートルに「皇帝」の称号を授与し、ここに「ロシア帝国」が成立した。これ以後ロシアは東欧世界の強国として、ヨーロッパの国際舞台に現れることになった。

18世紀後半に帝国を統治したエカチェリーナ2世は、南方でオスマン帝国と戦い、西部国境ではプロイセン、オーストリアとともに三次にわたってポーランドを分割して、自国の領土を拡大した。エカチェリーナ2世はまた東方にも目を向け、外交使節ラックスマンを日本に派遣して通商を開こうとした。

体制の動揺 ～デカブリストの乱とクリミア戦争～

ロシア帝国は、その後さらにカムチャツカ半島やアラスカへと進出して支配領域を拡大した。一方、内政面では農奴制が一層強化され、さまざまな権利を制限された農民の多くは貧しい生活状態にあった。1825年には専制政治と農奴制の廃止を求めるデカブリストの乱が起こったが、短期間で鎮圧され、こののち専制体制の整備がはかられた。

長らくオスマン帝国と対立していたロシアは、オスマン帝国の衰退に乗じて1853年に戦争を始めたが（クリミア戦争）、オスマン帝国を支援して参戦したイギリス・フランスの近代的軍備の前に敗退した。クリミア戦争での敗北は、ロシアの人々に自国の後進性を認識させることになった。

「大改革」と帝国の発展 ～ロシアの近代化とその矛盾～

クリミア戦争の敗北後、ロシア皇帝アレクサンドル2世は、1861年の農奴解放令をはじめとする体制改革に着手した。地方行政改革、司法改革、軍制改革、教育改革など多方面におよぶ改革は、「大改革」と称された。これらの諸改革は、西ヨーロッパの諸制度を取り入れて帝国の国力強化を目指した「上からの」近代化政策であった。専制君主制の枠組みを維持しながら西歐的近代化を進めようとする政策は、伝統的なロシア社会に混乱を招くことになり、「大改革」は不徹底なものにおわった。

「大改革」による社会環境の変化のなかで、都市を中心に新しい「市民社会」的要素も現れたが、人口の大多数を占めた農民は農奴解放後も地主のもとで従属的な立場におかれ、農村の古い構造は残っていた。改革の停滞に不満を抱く知識人の一部は急進化し、その中からテロリズムで体制を転覆しようとするグループも現れた。19世紀末にはロシアにおいても本格的な工業化が進んだが、貴族・資本家層と工場労働者・農民とのあいだの格差は大きく、反体制的な知識人は社会変革を求める動きを次第に活発化していった。

